

中国の伝承医療に学ぶもの

大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
天然医薬品学分野

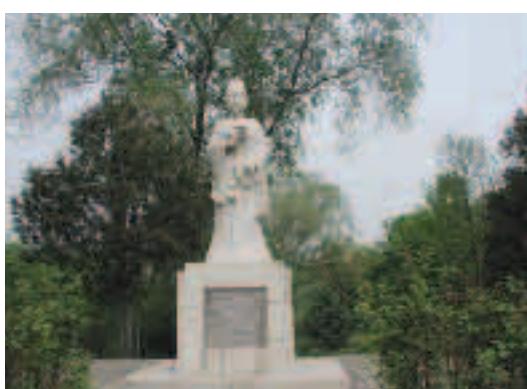
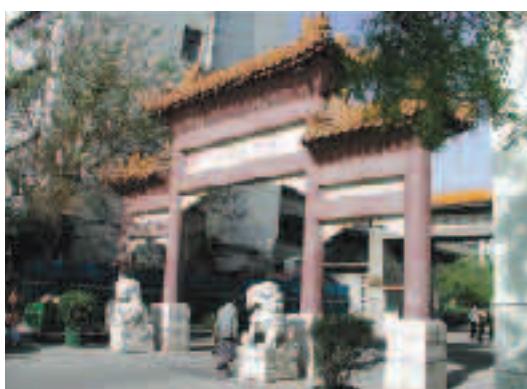
川添 和義 KAWAZOE Kazuyoshi



平成13年度文部科学省在外研究員として、2001年5月より1か月間、北京にある中国医学科学院藥用植物研究所および北京中医药大学を訪問いたしました。現在、北京は1千万人を超える人口を抱える大都會となつていて、上海とともに中國の發展を象徴する街でもあります。

訪問の目的は中国で使用されている中藥材（中医学で用いられる藥材）に関する研究で、日本で用いられている漢方藥の材料とはまた違った藥材に巡り会うよい機会となりました。中医学は現在の中国社会でも力強く生きており、おじろ西洋医学より生活に溶け込んだ医療体系と言えます。また、医師、薬剤師も西洋医学と中医学ではライセンスが異なつていて教育課程も異なるので

すが、相対峙するものではありません。互いに有利な点は取り入れようという考え方が一般的で、一つの病院で中医学と西洋医学の医師が患者の希望を取り入れながら協力して治療に当たるというケースが多く見られました。このような考え方方は日本ではまだほとんど浸透していないものと見えます。私の訪れた藥用植物研究所では中医藥理論に基づいた医藥品開発をはじめ、原料植物に関する化学的研究など、また、中医药大学では中藥を用いた新規藥剤の開発研究や、氣功、按摩、鍼灸の中医学治療法に関する教育研究なども行われていました。このように中国の伝承医学を忠実に、また、積極的に現代社会に取り入れようと姿勢には大変学ぶものが多いように思えました。



今回は短期間の出張なので単身で訪れたのですが、普段の生活は同じ東アジアの国であるためか、あまり違和感のないものだたと思います。食事は当然中華料理なのですが日本で見るような、きれいなお皿になりました。このような考え方方は日本ではまだほとんど見られず、並べられたものはあまり見られず、学校の食堂では金属のお皿のつりに飯とおかずが一緒になつたようなものを食べることになりました。見た目はあまりよくなじのですが、味は決して悪くなく、何と云つても安い（1食100円程度）のが魅力的でした。それと普通の大学の食堂で立派な建物で、メニューの種類が大変多いにも驚きました。中国では「医食同源」と言われるように日々の食事を大変重要視しています。昨今、日本でも薬膳など食に機能性を



追求する考えが芽生えてきていました。中国ではすでにそのような考え方方が広く確実に入々に定着していることを実感しました。そのように考へると、古く日本が中国に学んだ如く、現在に至つてもまだこの国から学ぶことは多いものと思います。